

平成二十二年八月一日発行（毎月一回一日発行）通巻八四七号

火星

平成二十二年八月号



七曜抄 (七)

山尾玉藻

水音に巻きたしかなる落し文

でで虫の顔三角に仕舞ひけり

かまきりのながなが飛び朝曇

杉の間を戻つてきたる夏花摘

夜もすがら李の匂ふ安居かな
大仏の近くに寝ぬる旱星
空腹のしづかにありし花藻かな
堂守も鶏も出でをり夕立あと
苔の上を風ぬけてくる円座かな
草山の濡れてゐるなり盆の昼

太白星

柳生千枝子

仔猫鳴くひよろりと歩みては転び
腕まくら汗の幼ナの深眠り
耽読の片頬緑射してをり
桐咲けり飛行機雲の未だ消えず
遠ざかる白帆の速さ夕茜
波音の夕べはげしく月見草
母の日の昏れてレモンの月が泛く

杉浦典子

帆柱の軋み八十八夜寒
息を吐ききつて海月の暗みたる

祀るごと白繭ひとつづつに影
舫ひ綱解くに手順ある薄暑
じやがいもの花に正午の列車過ぐ
左利きの左が掴み青蛙
新仏に濡れゐるままのさくらんぼ

浜口高子

触れ合へるヨットの音の潮じめり
瀧風におでんの湯気のおふられし
山水の軸をもたげし青嵐
灯がひとつ入つてゆきし瓜畑
午下の海荒れてゐるなり心太
檻つかむ猿に見らるるソーダ水
蟬の殻昨夜のバケツの雨水に

火星作品

山尾玉藻選

羽拔鶏いちべつの眼をつむりけり
宝塚蘭定かず子

失職の指へ渡らせ天道虫

観音に青梅は枝張りにけり

糸伸ばしきし蜘蛛の子の草のいろ

月下美人見にゆくシャワー使ひけり

水口の濁れる八十八夜かな
明石戸栗末廣

近景も遠景も山昼寝覚

下闇に入る水音のひびきけり

クレソンの花に終はりぬ野辺送り

田を植ゑて富士の裾野へ線路あり

釣り捨てし鱈にそよげる月見草
宝塚山田美恵子

広げある秣の上を夕立雲

牛乳の膜唇につく終戦日

寝入る子に汗かく力ありにけり
 呼ぶ子の名間違へるよ花ダリア
 壬生狂言うしろ電車の通りけり
 神 戸 深 澤 鱻
 黄昏る扇光れり壬生念仏
 赤貝のひも噛み八十八夜かな
 クレソンの花の馬穴の明易し
 麦秋や余呉湖を出づる川ひとつ
 夏鶯朝の湯浴みのやはらかし
 宝 塚 山 本 耀 子
 薩摩隼人の家紋入りなる初幟
 菖切や葦の根元の水溜り
 夏草食む音の他なし岬馬
 にはとりの樹にねまりたり麦の秋
 夕さりの川は鏡に祭鉦
 松 井 倫 子
 蠓蚊のなか自転車に浮き来たる
 南吹く碑にびつしりと象形文字
 妖精に注意と札や虹消えて
 峡空に雲暮れ残る祭笛

選のあとに

山尾 玉藻

糸伸ばしきし蜘蛛の子の草のいろ 蘭定かず子

卵から孵った蜘蛛の子は伸ばした糸と風に乗って移動する。掲句の「蜘蛛の子」も何処からか風に乗ってきて、木の枝などから糸を伸ばしてきたのだろう。「草のいろ」という感受に、作者の新鮮な驚きと小さな命への慈しみが滲み出ている。この一語で「蜘蛛の子」を美しく荘厳させている。自然を見詰めること、それは愛。同時発表作「月下美人見にゆくシャワー使ひけり」には女性特有の心理が描写されている。

クレソンの花に終はりぬ野辺送り 戸栗 末廣

亡骸を火葬に付した後、川沿いを戻る作者が見える。クレソンは清流に自生し白い花を咲かせる。作者はそのクレソンの花に亡き人の面影をふと重ねたのだろうか。それとも人を葬った虚しさを噛みしめているのだろうか。一見労を尽くさぬ表現のようながら、楚々とした「クレソンの花」に無量の思いを語らせる深い一句である。

寝入る子に汗かく力ありにけり 山田美恵子

さつきまで飛び跳ねていた子が、今はぐっすりと昼寝をしているのだろうか。見れば全身から汗が噴き出ている。「汗かく力ありにけり」に、その旺盛な汗に心底驚嘆しつつ幼い寝顔に見入る作者が窺える。子供は眠ることにも無心で懸命なのだろう。同時発表作「釣り捨てし鯉にそよげる月見草」には作者の優しさが滲み出ており、これも愛ある一句。

黄昏るる扇光れり壬生念仏 深澤 鱻

壬生寺の「壬生念仏」は、開け放ったお堂で執り行われる無言の仮面劇、謂わばオーブンステージでのパントマイムである。掲句、黄昏せまる薄暗い堂内で、掲げられた扇だけが夕明かりをうけて浮かぶ、印象的な景である。野外の趣を取り込む無言劇らしく、夕明かりの「扇」に焦点を絞ったところに手練れの作者の手際を感じる。

にはとりの樹に寝まりたり麦の秋 山本 耀子

放し飼いの鶏が樹に止まり眠っている。辺りの麦畑はすっかり熟れ切り、昼は森閑と深まるばかりである。物音ひとつ聞こえぬ静まり返った中、眠りこむ「にはとり」の薄い臉が微かに動いたようだ。季語「麦の秋」によって、空間的、時間的な拡がりを感じさせる一句。(以下略)

恒星圈

白数康弘

夕焼の中なる五百羅漢かな
蚊の声のかすかを羅漢聴き給ふ
蜘蛛の囿のからまつてゐる羅漢かな
五百羅漢過りて蟻の列つづく
五百羅漢にいはいはれあれこれ萩の風

大東由美子

翡翠を追ふやまなじり青くして
釣竿を置き去りにして源五郎
白き胸ぐつとせり出す燕の子
コンビニのオープンを待つ夜の新樹
羽抜鶏風に押されて囃されて

高松由利子

練供養菩薩伏眼に戻りくる
馬場口とある門前や余花の風
くわくこうや乳色なせる五線塀
昼膳に間のある筥提げて来し
湖の音聞きわけてゐる糸取女

田中みのる

我が影の三倍五倍夏入日
若竹やスクール・ガイドの声さやか
ジーパンの神主が掃く松落葉
蚕豆や町筋かざる御神燈
扇港のクレーンに鳴り鯉のぼり

獅子座

山尾玉藻推薦

笠置 早苗

見てゐたるたんぽぽの絮飛びにけり
猫の子を唾へゆく親緑雨中
遠雷のまま遠のきし鴉の子
夏落葉雨の匂ひの風がくる

田中文治

萍の花をのけくる亀の首
すすめられ妻より早き更衣
山城は慣はし多し瓜の花
郭公の声遠のきし畦の鋤

奥田 順子

航跡の渦のつぎつぎ梅雨兆す
きのふより雨のまつすぐ青葉肥
伊吹嶺の裾に刈藻のしづくせり
柿の花母となりたる牛の貌

松井倫子

更衣緑青いろの沼に出で
谷風の山風となる夏芝居
水無月や杉板のせ来ライトバン
霧やマストの上の風向計

岩井ひろこ

金平糖の箱振つてみし柿の花
洋館の土足厳禁棕櫚の花
青年の背丈となりし更衣
奥の院へ坂がかりなる藤の花

藤原冬人

郵便夫出でくるモスク五月闇
中空に気球の浮かぶ入梅かな
畦に添ふ早苗のさ揺る月夜かな
銀紙の飴をまた剥く早梅雨

根本ひろ子

美術館出でし正面桐咲けり
馬あらふ父を見てゐる裸の子
病葉の張りついてゐる陶の椅子
居酒屋の箆に夏菜莢盛られあり